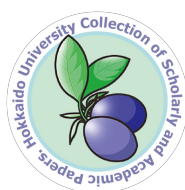




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	単位の実質化を目指す授業の設計：平成18年度北海道大学教育ワークショップ報告
Author(s)	西森，敏之；安藤，厚；細川，敏幸 他
Citation	高等教育ジャーナル：高等教育と生涯学習，15，175-190
Issue Date	2007-12
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.15.175
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33029
Type	departmental bulletin paper
File Information	No1515.pdf



単位の実質化を目指す授業の設計 —平成 18 年度北海道大学教育ワークショップ報告—

西森 敏之^{*}, 安藤 厚, 細川 敏幸,
山岸 みどり, 鈴木 誠, 池田 文人

北海道大学高等教育機能開発総合センター

Planning of Courses Respecting the Requirements for Credits More Strictly: A Report on the 2006 Hokkaido University Workshop on Education

Toshiyuki Nishimori^{**}, Toshiyuki Hosokawa,
Midori Yamagishi, Makoto Suzuki, and Fumihito Ikeda

Center for Research and Development in Higher Education, Hokkaido University

Abstract — In November 2006, Hokkaido University held the 9th Workshop on Education. This workshop was introduced to improve the education of Hokkaido University and it has been held once a year since 1998. The main theme of this year's workshop was to plan courses respecting the requirements for credits more rigidly, observing that the traditional education system of universities in Japan was not strictly based on the convention that a credit corresponds to 45 hours of study by students, including lectures, preparations, reviews, assignments, etc. The workshop had (1) three sessions about planning of courses, each of which consisted of minilectures, small group discussions and a general discussion, and (2) three lectures, one about the purpose of faculty development, one about the meaning of 'respecting the requirements for credits more strictly,' and one about academic harassment. It had 26 participants from all over Hokkaido University, 8 participants from 6 other institutions and 8 people of the task force, including the president of Hokkaido University and a lecturer, that is, 42 people in all. This report contains an explanation about what was done in the workshop, especially the syllabi of the courses worked out in the sessions.

(Received on March 31, 2007)

^{*}) 連絡先: 060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目 北海道大学高等教育機能開発総合センター

^{**}) Correspondence: Center for Research and Development in Higher Education, Hokkaido University, Sapporo, 060-0817, Japan

1. はじめに

2006 年 11 月 10 日, 11 日の両日, 「単位の実質化の方策」をテーマに奈井江町農業改善センター(奈井江温泉ホテル北乃湯)で, 第 9 回目の北海道大学教育ワークショップ(FD)が行われた。このワークショップで得られた成果(すなわち, 5 グループに分けられた参加者によりグループごとに作成された新しい科目のシラバス)を記録しておくことが, この報告の主目的である(付録参照)。

参加者は, 本学の研究科及び研究所等から(主に北大に着任後 5 年以内の若手)教員 25 名, 北見工業大学, 室蘭工業大学, 北海道教育大学, 秋田大学から 1 名ずつ, 弘前大学, 旭川工業高専から 2 名ずつの研修参加者合わせて 36 名に, 世話人, 講師, 事務職員など合わせて総勢 39 名であった。

今回のワークショップのテーマは, 「単位の実質化の方策」であるが, 今年度から一年次に導入された「履修単位の上限設定」によって, 1 科目当たりに学生が割ける時間が増加し, 「2 単位は 90 時間の学習に相当する」という国際基準に近づく環境が整ってきたいま, 「単位の実質化」を実現することは全学教育における現時点での最重要課題となっている。

2. 研修内容

今年は総長が用務のため奈井江まで行くことが不可能で, 総長の挨拶は事務局大会議室で行われることになり, 受付も事務局大会議室で行われることになった。午前 9 時より総長の挨拶があり北海道大学のさまざまな問題について説明があった。総長の挨拶のあと, 9 時 30 分に記念写真(写真 1)をとってバスに乗り込んだ。

奈井江町へのバスに乗ってから, 例年のように, 参加者の自己紹介という形で研修会が始まった。会場にはバスが予定通りの時間に到着し, 午前 10 時 45 分より, 高等教育開発研究部の細川敏幸のミニ講義「FD の目的と意義」, 続いて安藤厚高等教育開発研究部長のミニ講義「GPA と単位の上限設定について」で研修が始まった。

昼食後, 講演会でなく参加者がグループ作業をして成果を上げるという意味で「ワークショップ」という用語を使っていることを説明し, 作業がスムーズに進行するために重要なアイスブレイキングを, グループ名を決めるとか小さな課題をいくつかグループ作業で行い, 本格的なグループ作業に入るための準備を行った(写真 2)。

写真 1. 記念写真

表 1. 平成 18 年度の北海道大学教育ワークショップのプログラム

2006 年 11 月 10 日 (金)

8:30	北大事務局前集合 (事務局大会議室で受付)
9:00	挨拶「FD 実施にあたって」(中村総長) 事務局大会議室
9:25	記念写真撮影
9:30	バス 出発 研修開始：オリエンテーション
10:40	ないえ温泉「ホテル北乃湯」到着
10:45	ミニレクチャー「FD の目的と意義」(細川敏幸)
11:15	ミニレクチャー「GPA と単位の上限設定について」(安藤厚)
12:00	昼食
13:00	研修のオリエンテーション「ワークショップとは」・アイスブレイキング (細川敏幸)
13:30	ミニレクチャー「カリキュラムの構成要素とシラバス」「学習目標」(西森敏之)
14:00	グループ作業 I の課題の説明
14:10	グループ作業 I「授業の設計 I：科目名・目標の設定」
15:10	発表・全体討論
16:00	休憩
16:20	ミニレクチャー「教育方略」「講義について」(西森敏之)
16:50	グループ作業 II の課題の説明
17:00	グループ作業 II「授業の設計 2：(目標の手直しと) 方略」
18:00	発表・全体討論
18:50	夕食
19:30	休憩 (風呂など)
20:20	講演「アカデミック・ハラスメントについて」(大畑昇歯学研究科教授・学生相談室長)
21:00	懇親会

2006 年 11 月 11 日 (土)

7:30	朝食
8:30	ミニレクチャー「評価」(山岸みどり)
9:00	グループ作業 III の課題の説明・
9:10	グループ作業 III「授業の設計 3：(方略の手直しと) 評価」
10:10	発表・全体討論
11:00	休憩
11:10	参加者の個人的感想や意見
12:00	昼食
13:00	バス出発
14:30	北大学術交流会館前到着

写真 2. アイスブレイキング

ワークショップのメインプログラムでは、参加者を 5 グループに分け、単位の実質化を実現するための工夫を盛り込んだ新しい授業を設計するという課題で、グループ作業を行った。

授業の設計は、3 回のセッションに分けられ、(I) 科目名と目標、(II) 方略 (15 回分の授業内容)、(III) 「評価基準」、の順に行われた。おのおののセッションは、

- (1) 30 分程度のミニ講義、
 - (2) 小グループに分かれての 60 分の討論、
 - (3) 全員が集まっての討論の成果の発表会、
- という 3 つの部分からなり、このセッションを繰り返すという構成で行われ、例年のように有意義な会になった。

より具体的には、参加者全員を名簿順に A, B, C, D, E, A, B, C, D, E, ... のようにグループ分けし、各グループがさまざまな専門の人たちからなるようにした。それぞれのグループは、あらかじめ指定されている

- A: 一般教育演習
- B: 一般教育演習
- C: 一般教育演習
- D: 特別講義
- E: 総合科目

のような設定の科目を設計するという課題に挑んだ。ただし、単位の実質化を実現するような仕掛け

写真 3. 大畑教授の講演

を組み込むということが要求されている。

グループ作業では、1 日目の午後に「科目名と目標」と「方略 (15 回分の授業内容)」, 2 日目の午前に「評価基準」という順で、3 回のセッションに分けてシラバスを作成した。

今回の新しい試みとして、1 日目の夕食後に、大畑教授による「アカデミック・ハラスメント」についての講演会を行った (写真 3)。

3. アンケート結果

参加者に対するアンケートも例年のように行われたが、ポジティブな回答が多かった。

ワークショップ終了後、昼食前に行われたにアンケート「ワークショップ総合評価」に対する回答を纏めたものが表 2 (a), (b) である。

4. おわりに

今年も例年のように有意義な会になったが、研修会参加者は主に北大に着任後 5 年以内の教員を対象とするということになって以来、若手の教員が多く全体討論におけるプレゼンテーションも鮮やかで、自由で活発な討論が行われ、楽しい会になっている。

表 2 (a). アンケート「ワークショップ総合評価」の回答集計

表 2 (b). アンケート「ワークショップ総合評価」の回答集計

付録． 平成 18 年度北海道大学教育ワークショップのプロダクト (以下は各グループの提出した成果である OHP と記録を 参照して、報告者がまとめたものである)

グループ A のシラバス

川口 暁弘 (文学研究科), 福井 彰雅 (理学院), 武隈 洋 (薬学院),
鈴木 卓 (農学院), 藤原 正智 (地球環境科学研究所),
豊田 雅朝 (国際戦略本部), 高田 知哉 (旭川工業高専)

<シラバス I. 科目設定>

【科目名】 一般教育演習「温泉学」

【一般目標】 火山国である日本では温泉は非常に身近な存在である。温泉は我々の生活にどのような影響を与えてきたのだろうか？ この演習では様々な観点を通じて温泉の役割を理解する。

【行動目標】

グループワーク

- (1) 集団での討論および意志決定ができる。
- (2) 情報収集の手段を列挙し (インターネット, 図書館の利用など), 実際に利用できる。
- (3) 収集した情報を加工し, 相手に分かり易く伝達 (プレゼンテーション) する技能を習得する。

個人

- (1) 授業で得た知識を整理し, 論理的かつ読み易いレポートを作成できる。
- (2) 温泉に関する幅広い知識を説明できる。

<シラバス II. 方略> (設定: 週 1 回 90 分で 15 週の授業)

- ① ガイダンス (グループ分け, 問題設定 etc.)
- ②③④⑤ 専門家グループ作業 (1) 5 名×4 グループ
 - ・方針決定
 - ・テーマ毎の情報収集 (地質学, 医学, 経営学, 歴史学)
 - ・議論 ・発表準備 ・発表
- ⑥⑦⑧⑨ 専門家グループ作業 (2)
 - ・専門家グループ最終報告書提出
- ⑩ 現地視察
- ⑪⑫⑬⑭ スペシャルチームグループ作業 4 名×5 グループ (グループ組み替え)
 - ・「村おこし」
- ⑮ 総括 →最終報告書提出

＜シラバスⅢ. 評価＞

- (1) 出席点 10 点
- (2) 観察記録 10 点 (10 点は初めの点数, 減点法で採点)
- (3) プレゼンテーション ... 40 点 (20 × 2)
 専門家グループ作業 (1).... 形成的評価 (評価に含めず)
 専門家グループ作業 (2).... 総括的評価
 スペシャルチーム作業 総括的評価
- (4) レポート 40 点 内容は (3) に同じ
 通常のレポートに加え個人の貢献を示す 1 次レポートをつける

※ 補足 (3) はグループ毎の採点。(4) は個人別の採点。相互評価は (3) に含む。

※ ※ T A について TA は採点と実際の作業での助言を担当

専門家グループ作業

- ・地質学, 医学, 経営学, 歴史学の 4 テーマを設定
- ・テーマ毎に 1 グループをつくる (5 名 × 4)
- ・【第 2 回】方針決定 【第 3 回】情報収集 【第 4 回】発表準備 【第 5 回】発表
 → 中間報告書提出

スペシャルチームグループ作業

- ・専門家チームから各 1 名を抽出して, 素ペやるチームを結成する
- ・「村おこし」のモデルを作成する
- ・報告書提出

グループ B のシラバス

谷古宇 尚 (文学研究科), 山口 博之 (医学研究科), 山本 融 (薬学研究院),
谷 宏 (農学研究院), 神谷 裕一 (地球環境科学研究院),
中谷 久之 (北見工業大学), 大澤 智子 (旭川工業高専),

<シラバス I. 科目設定>

【科目名】一般教育演習「生命 (いのち) を科学する」

【一般目標】

必ずしも正しい答えのない問題に対して, 自らの意見を形成するために, 生命を題材にして, 問題を適切に設定する能力・論を形成する能力を身につける。

【行動目標】

- (1) 生命を成り立たせている物質的基盤を把握できる。
- (2) 生命についての多種多様な考えを理解する。
- (3) 生命についての様々な問題について自ら, 問題設定出来る能力を養う。

<シラバス II. 方略> (設定: 週 1 回 90 分で 15 週の授業)

<講義回> <内容>

- ① オリエンテーション
- ② 生きもののなりたち
- ③ 生命の誕生
- ④ あなたの体ができるまで
- ⑤ 再生医療とその課題
- ⑥ 生命をめぐる倫理と法
- ⑦ 四の受け入れ方
- ⑧ フィールドワーク
- ⑨ 特別講義
- ⑩⑪⑫⑬⑭ グループ学習
- ⑮ まとめ

グループ学習内容

- ・生命の進化のプロセス
- ・人の死にあたって考えること
- ・生命の誕生 —物質としての生命と社会の中での生命の違い—
- ・ヒトはどこからヒトか 受精卵→着床→6ヶ月→誕生→3才
- ・生殖による生命の誕生とクローン技術による生命の誕生は同じ? 違う?

＜シラバス III. 評価＞

＜評価項目＞	＜評価比重＞
出席	30%
ポートフォリオ	10%
レポート	30%
発表	30%

＜評価方法＞

- ポートフォリオ 自らつかみとった言葉・論理的思考がくみ取れる..... 10 点
 - レポート 400 字 過不足無く要約でき，論理的に構成されている
1 回につき 5 点
 - 発表
 - ・ 話の展開が適切か
 - ・ 問題設定までのプロセスが適切か
 - ・ 論理が明瞭か
 - ・ 説得力があるか
 - ・ 質問を正しく理解し，適切に返答できるか
-

グループ C のシラバス

水野 浩二 (法学研究科), 鷺見 尚己 (医学研究科), 橋本 直幸 (工学研究科),
五嶋 聖治 (水産科学研究院), 原 亮一 (情報科学研究科),
吉田 英樹 (室蘭工業大学), 宇田川拓雄 (北海道教育大学)

<シラバス I. 科目設定>

【科目名】

一般教育演習「わたしのエコライフ宣言—キャンパス編—」

【一般目標】

地球環境問題について理解を深めるために、学生が先ずは自らの問題として捉え行動できるようになる。

【行動目標】

- (1) 自分たちに与えられたテーマについて、問題点と課題を説明できる。
- (2) グループの中で自分の意見を述べ、討論できる。
- (3) プレゼンテーション能力を身に付ける。

<シラバス II. 方略> (設定: 週 2 回 60 分で 15 週 = 30 コマの授業)

<講義回> <内容>

- ① イントロダクション
- ② ミニレクチャー (1) グループ形成, 個人テーマの決定
- ③④ ミニプレゼンテーション, ディスカッション
- ⑤ プレゼンテーション準備
- ⑥ グループ内プレゼン ファイナルレポート, ポートフォリオ (____は評価対象)
- ⑦ テーマ関連の視察
- ⑧ ミニレクチャー (2) テーマ選び 個人からグループへ
- ⑨ グループ内役割分担
- ⑩ データ収集 グループのキャンパス環境 ISO 作り
- ⑪⑫ ディスカッション (1), (2)
- ⑬ プレゼンテーション準備
- ⑭ グループプレゼンテーション (1)
- ⑮ グループプレゼンテーション (2)

<シラバス III. 評価>

<評価項目>	行動目標			<評価比重>
	1	2	3	
レポート	○			40
ポートフォリオ	○			20
発表 (プレゼン)			○	10
ディスカッション		○		30

＜レポートの評価基準＞

- ・テーマが明確に設定されているか
- ・必要な情報が調査されているか
- ・論理的に議論が展開されているか
- ・文法的に正しいか
- ・内容の明確なまとめがなされているか

＜ポートフォリオの評価基準＞

- ・全体の構成
- ・問題点の把握
- ・代替策の提案
- ・代替策の問題点
- ・評価（ケーススタディを含む）

＜ディスカッションの評価＞

ある学生のケース

- ・リーダーシップはあるけど、
- ・他人の意見を聞かない
- ・勢いで議論しがち

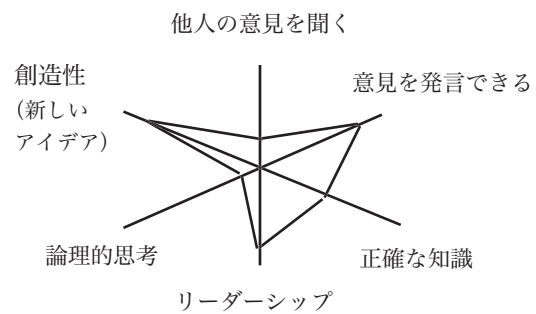


写真 8. グループ討論

写真 9. 発表

グループDのシラバス

鈴木 輝好 (経済学研究科), 船橋 誠 (歯学研究科), 奈良林 直藤 (工学研究科),
森 康澄 (水産科学研究院), 李 明玉 (言語文化部), 土持 法一 (弘前大学),
細川 和仁 (秋田大学)

<シラバスⅠ. 科目設定>

【科目名】 特別講義「国際社会の中での日本人の役割」

【一般目標】 国際人としての自覚を持ち, 国際性を涵養する。

【行動目標】

- (1) 日本と外国の文化・習慣の違いを列記できる。
- (2) 国際社会の中での日本の役割を説明できる。
- (3) 高邁な野心を抱く。
- (4) 行動の目標をたてることができる。説明できる。

<シラバスⅡ. 方略>

【授業内容】

- ① ガイダンス (コーディネーターが担当) 後, 総長
- ② 日立社長
- ③ 松下社長
- ④ IHI 社長
- ⑤ 小柴先生
- ⑥ 野依先生
- ⑦ ドナルド・キーン
- ⑧ 明石氏 (元国連)
- ⑨ 緒方貞子
- ⑩ 町村元外相
- ⑪ 新庄 剛
- ⑫ 三浦雄一郎
- ⑬ 毛利 衛
- ⑭ 魚井一生
- ⑮ 北京大学長 閔氏

＜シラバスⅢ. 評価＞

【評価項目】

国際社会に関する知識

野心

行動計画

【評価方法（比重）】

試験..... 30%

知識・講師による設問..... (1), (2)

ポートフォリオ..... 40%

・感銘を受けた人..... (3)

・行動計画の具体性..... (4)

出席..... 30%

ポートフォリオ・メモ

グループ E のシラバス

神保 秀一 (理学院), 東野 史裕 (歯学研究所), 小篠 隆生 (工学研究所),
井上 晶 (水産科学研究所), 原田 真見 (言語文化部), 大高 明史 (弘前大学)

<シラバス I. 科目設定>

【科目名】総合講義『『だまし』の構造～人はなぜだまされるのか?～』

キーワード: 心理・脳波・宗教・神・文化・擬態・だまし絵・歴史

【一般目標】

人間という生物には、「だまし」の構造が必然である。

「だまし」という2面性を軸とした自然・文化史の総合的・比較的解説によって、専門分野に進む前段階の学生が多角的な見方を学ぶ。

クリティカルシンキングという「科学する」ためのリテラシーを体得する。

【行動目標】

- (1) 社会における事象を自分自身で発見し、多角的に説明することができる。
- (2) 自然文化社会におけるだましの事例と成立の背景を説明できる。

<シラバス II. 方略> (設定: 週2回60分で15週=30コマの授業)

【授業内容】

- ① ナビゲーターによるオリエンテーション
- ② だまし絵 —絵画論—
- ③ だまし絵 —心理学—
- ④ だましと宗教史
- ⑤⑥ 動物・植物の擬態
- ⑦ だまされたい心理とは 手品・マジック
- ⑧ だましと脳科学
- ⑨ 錯覚・錯視
- ⑩ 空間デザインにおける心理と行動
- ⑪ 医学における心理応用
- ⑫ 統計学におけるだまし
- ⑬ 悪意のだまし —報道・偽装—
- ⑭ グループディスカッション
- ⑮ 全教員における講評

＜シラバス III. 評価＞

【評価項目と評価の比重】

形 成 的 評 価 ／ 総 括 的 評 価	(1) 出席	20%
	(2) e-learning	10%
	(3) — 1 レポート A (基礎的知識の理解)	20%
	(3) — 2 レポート B (知識+創造的発想)	20%
	(4) ポートフォリオ	30%
	(5) 総合評価	100%

担当者の役割

- 1) コーディネーターグループ (4～5人) (1), (3) — 1, 2, (4), (5)
 - ・授業の担当
 - ・全体の設計
 - ・出席管理
 - ・レポート, ポートフォリオ評価
 - ・総合評価
- 2) 各回の授業担当者
 - ・授業の担当 (予習資料の作成を含む)
 - ・e-learning